

『女と男のバリアフリー』

第12回未来館トークサロン下村満子と語る会inいわき市より
とき 12月16日(土) ところ 緑蔭茶房かいわい

福島県男女共生センター「女と男の未来館」の館長、下村満子さんは、始めに、男女共同参画とは「重要な決定の場に女性も参加する」という理念であって男女平等をより進めたものです。わたしは、それを「女と男のバリアフリー」と言っていますと話しました。

男女が住みよい社会にするため、幸せの最大公約数を高めていき、両性が共同でやっていくことに意味があると語りました。そしてひとりの人間としてどう生きるか、新しい生き方を考える時代に入り、選択した自分の生き方に対し責任を自分で負うということが大切であると述べました。



また、9月2・3日(土・日)に行われた未来館フェスティバルでは、シンボルイベントとして行われた参議院議員川口より子さんとの対談の中で館長は、仕事と家庭の両立がタブーだった時代、女性は男性よりプラスαの武器を持たなければならなかった体験を話し、川口さんは女性が緩衝になる生き方ではなく、自分自身が前向きな気持ちで物事を大きく考えていくことの必要性を訴えました。

『We are ~わからないから信じあう。 知らないから支えあう。』

日本女性会議2006しものせきより
とき 10月6・7日(金・土) ところ 山口県下関市

大会実行委員長濱本笙子氏が、本質的な男女共同参画社会の実現とは、「全ての人と人が互いに異なる価値観や文化背景の中で、わからないからこそ信じあい、知らないからこそ支えあうことの大切さを認識することから始まり、そして、それは男女という性差のみに捉われることなく、全ての人々の人権とも真摯に見つめ直すことに繋がる」とあいさつしました。

「教育・学習」の分科会では、導入として山口県における男女混合名簿の実施状況は、小学校で95%、中学校で76%、高等学校では100%であることが発表され、「自分らしく生きる」ことのできる人づくり～学校教育をとおして～のテーマのもと、「自分が好き」と思えると同時に、他人の人権をも大切にし、互いに支えあっていける人づくりを、学校教育をとおしてどう展開できるかが話し合われました。男女共同参画の考え方の推進は、家庭、地域、学校、職場を取り巻く大人の意識改革こそが必要であるとまとめました。

『男性優位社会だから、男は損だ。』

第17回男女共同参画全国都市会議inうつのみやより
とき 10月25・26日(木・金) ところ 栃木県宇都宮市

宇都宮大学と宇都宮文星短期大学の学生8名による討論『男性が得か、女性が得か!?』の分科会では、家庭・仕事・社会構造の観点から「男女どちらが得か」と、学生たちが質疑に答える方式で討論が行われました。

「現代は男性優位社会だから男性が得である。」という意見が多い中、一人「男性優位社会だから損だ。」と述べた男子学生がいました。「自分は優柔不断で戦えない人間なので、男だから仕事で頑張れと言われるのがとても辛い。将来は好きな家事をして主婦になりたい。」と話していました。

また、シンポジウムではトヨタウッドホームの社長(男性)が、「世界1位だった男性の平均寿命が2位になってしまった原因のひとつに、40～50代の男性の自殺者が35,000人を超えていることがあげられる。家事・育児・仕事の両立というワークライフバランスを考える上で、女性の立場だけでなく過酷な労働と競争を強いられている男性たちにおいても働き方を変えていくことは急務である。」と問題点を指摘していました。